

気仙沼復興プロジェクト「ざんぞかたり」

総合政策学部 2年 樋口陽平

■概要

本活動（「ざんぞかたり」）は、慶應義塾大学の教員と学生が行う震災復興支援プロジェクト「気仙沼復興プロジェクト」のざんぞかたりチームが企画したワークショップである。今回の活動は、2011年8月11日、宮城県気仙沼市魚市場3回会議室で、気仙沼関係者を対象に行われた。第2回目となる今回は「傾聴」をテーマに、市内復旧作業に最前線で取り組む経営者の方々にお集まりいただき、学生ファシリテーターによるワークショップを行った。

■活動報告

期日：2011年8月11日 12:00~13:30

場所：宮城県 気仙沼市 海の市 3F 会議室

参加人数：34名（気仙沼市の経営者の皆様、気仙沼関係者の皆様、慶應大教員、慶應大学生、京都大学・東洋大学などの学生）

目的：傾聴のワークショップを通じて、気仙沼に関わる人が、復興活動に取り組む人の想いを傾聴する姿勢を培う。

ワークショップの様子：

震災から5ヶ月経った気仙沼市で現在の心境や、震災復興に対する想いを共有する「傾聴」のワークショップを行った。ワークショップでは「フィッシュボウル」といわれる形式の対話を行った。大きく円をつくるように座席を配置し、内円の人間がディスカッションを行い外円の人間がディスカッションを聞く。ディスカッションがある程度進行したら内円の人間と外円の人間の一部が入れ替わり、それを繰り返しお互いの意見を聞き・考えるといったファシリテーションである。会場の定員は約30名であったが、企画当日は会場が満員になるほど多くの皆様に足を運んでいただけた。地元の経営者の方、気仙沼市在住の方をはじめ、慶應大学気仙沼復興プロジェクトメンバー、他にも京都大学の大学院生や大島の民宿にインターン生として来ていた東洋大学の方などが参加、年齢層も最年少が小学3年生、最高齢が75歳と所属、年齢、属性の多様性にあふれる顔ぶれが集まった。ワークショップの内容としては、フィッシュボウル形式で地元企業経営者の皆様に震災時の体験と自身の現状、復興のビジョンを語ってもらった。経営者の方々が震災当初のお話をされた時、震災から五ヶ月経って、徐々に薄れてきた感覚をもう一度噛み締めるかのように語られていたのがとても印象に残った。自身の地元の産業

を支えている経営者の皆様の切実な意見から、慶大メンバーら大学生も大きな衝撃を受けた様子であった。90分という短い時間のワークショップであったが事後に行ったアンケートでは、ほとんどの参加者に高い満足感を与えることができた。また、参加者の中には自身と違う立場の人間の考えを、丁寧に聞くことが新鮮な体験になったと感想を述べる人もいた。



普段はゆっくり顔を合わせることもない顔ぶれが集まる



最年少参加者は小学生



帰省した20代の若者も参加



短い時間ながら多くの意見が飛び交った

※写真：ワークショップの様子

■今後の展望

気仙沼プロジェクトにおける「ざんぞかだり」プロジェクトは以降も継続して行う予定である。「ざんぞかだり」の目的の一つである「被災地から新たなコラボレーションを生み出す」を実現するために今後は気仙沼での開催を行いつつも東京や関西での開催を行い、日本全国の思いや問題意識を気仙沼につなげ、問題発見解決の糸口にしたい。

■謝辞

今回のイベントは、2011年度湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワーク基金」の支援によって行われた。末尾ながら記して感謝申し上げる。